世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Significance of International Baccalaureate Education from the Viewpoint of Buddhism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): no self and dependent arising, International Baccalaureate, The IB Learner Profile, school spirit 作成者: 田中, 無量 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1246

Significance of International Baccalaureate Education from the Viewpoint of Buddhism

TANAKA Muryo

Key words

no self and dependent arising / International Baccalaureate / The IB Learner Profile / school spirit

Summary

This paper examines the mission of International Baccalaureate (IB) from the perspective of Buddhist studies, and argues for a close relation between the aims of IB education and the teachings of Buddhism.

Private schools have a "School foundation spirit." On the other hand, the IB has the "IB mission," which is embodied in the IB Learner Profile. Therefore, it can be said that the problem of how the IB learner image matches the "school spirit" of the school is an issue that must be considered if it is to be introduced. In order to introduce it at Buddhist schools, it is necessary to clarify the relationship between Shakyamuni Buddhism and IB. This paper will discuss the significance of IB education at Buddhist schools by revealing link between the "IB learner image" and the fundamental idea of Shakyamuni Buddhism, "no self and dependent arising".

Shakyamuni Buddha reached the enlightenment, through the realization of "no self" and "dependent arising," understanding that everything does not exist alone and is therefore interconnected. Buddhist religious education thus places importance on this truth and is aimed at awakening those who have not yet realized this truth.

When viewing the IB Learner Profile from the Buddhist perspective, there are two remarkable points: one is the use of "we" and the other is the reference

to responsibility. These two points correspond to the viewpoint of interconnectedness and compassion, and the viewpoint of well-earned punishment.

In conclusion, the paper claims that the IB education programme, often regarded as Western, in fact accords with Asian Buddhist thinking.

Furthermore, an educational logic that complements “Buddhism” and “IB” can be derived. It is not only the case that the Buddhist thought predating IB can be understood in connection with modern IB education, which is said to be Oriental thought, but also if a Buddhist school whose foundation spirit is based on Buddhism is to introduce IB education with the philosophy of selflessness and dependent arising in Buddhism as the foundation of the IB learner’s image, this will became a characteristic unique to Buddhist schools in IB education. And so it can be said that IB education itself will become a significant part of the Buddhist school.

仏教からみる国際バカロレア教育の意義
――釈尊仏教の無我・縁起とＩＢの学習者像――

田　中　無　量

仏教からみる国際バカロレア教育の意義

――釈尊仏教の無我・縁起とＩＢの学習者像――

田中無量

〈キーワード〉国際バカロレア教育／無我／縁起／学習者像／建学の精神

序論

一九六八年、スイス・ジュネーブにて設立された「国際バカロレア（International Baccalaureate 以下、ＩＢ）」の教育プログラムは、「教育の国際化」による「世界に通用する人間の育成」の視点を持つものである。すなわちＩＢ教育は、国際バカロレア機構（ＩＢＯ）が提供する国際的な教育プログラムであり、ディプロマプログラム（以下、ＤＰ）において、国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与えている。その一方で、私立学校には「建学の精神」があり、「建学の精神」には、創設者の教育観や教育への理想像、あるいは宗教教義などがある。他方、ＩＢには「ＩＢの使命」（The IB mission）を具体化した「ＩＢの学習者像」（The IB Learner Profile）がある。したがってそのＩＢの学習者像が、自身の学校の「建学の精神」といかに合致するものであるかという問題は、導入する以上常に問われ、また考えておかねばならない課題であ

るといえる。[1] 仏教校において導入する場合には、仏教とＩＢの関係を明らかにする必要があろう。そしてそれを明かすことにより、広く仏教校においてもＩＢ教育が受け入れられていくはずである。[2] そこで当稿では、「仏教からみる国際バカロレア教育の意義」と題し、釈尊仏教の根本思想である「無我（非我）・縁起」から「ＩＢの学習者像」を明かしていくことで、仏教校におけるＩＢ教育の意義について論考したい。

一　「ＩＢの学習者像」と釈尊仏教の無我・縁起

ＩＢの学習者像について考えてみたい。ＩＢＯのＩＢＤＰカリキュラムモデルをみると（図１）、[3] その図の中心にはＩＢの学習者像が据えられている。

図１　ＩＢＤＰカリキュラムモデル
国際バカロレア機構「国際バカロレアとは?」より引用

大迫が「ＩＢ、そしてＤＰの「本質」はまさに「ＩＢの学習者像」にある」、「プログラム図の中心に置かれている「ＩＢの学習者像」、それこそがＩＢの核であり、本質である」[4] と述べているように、ＩＢの学習者像はＩＢＤＰの本質といえる。文部科学省によれば、[5] 国際バカロレアの理念は一貫した国際教育の観点から「ＩＢの使命」や「ＩＢの学習者像」として示されている。そのうち「ＩＢの学習者像」は「ＩＢの使命」を具体化したもので、「国際的な視野をもつとはどういうことか」という問いに対するＩＢの答えの中核を担う。具体的にはＩＢワールドスクール（以下、ＩＢ校とする）が価値を置く人間性であり、10の人物

像として表されている。それらを列挙すると（1）探究する人、（2）知識のある人、（3）考える人、（4）コミュニケーションができる人、（5）信念をもつ人、（6）心を開く人、（7）思いやりのある人、（8）挑戦する人、（9）バランスのとれた人、（10）振り返りができる人の10項目である。さらにＩＢ校はこの10の人物像に対し、以下の通り具体的な内容を示している。

（1）探究する人（Inquires）

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

（2）知識のある人（Knowledgeable）

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

（3）考える人（Thinkers）

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

（4）コミュニケーションができる人（Communicators）

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

（5）信念をもつ人（Pricipled）

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

（6）心を開く人（Open-minded）

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見いだし、その経験を糧に成長しようと努めます。

（7）思いやりのある人（Caring）

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

（8）挑戦する人（Risk-takers）

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

（9）バランスのとれた人（Blanced）

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

（10）振り返りができる人（Reflective）

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

（文部科学省「国際バカロレアの理念」[6] 傍線は引用者による。以下同。）

以上の10の学習者像から、ＩＢが「全人教育」を目指すものであることがわかる。

続いて、仏教教育と釈尊仏教の根本教説となる「縁起」と「無我」の思想について考えてみたい。仏教において究極の目的は悟りを開き仏となることである。高楠は、「仏教は徹底的人格向上の教である。徹底的人格向上がそのまま仏教である。その目的は教育と同一である。佛と云ふ大人格を標幟として我々の人格を向上するのである。」[7]と述べる。また竹内は、仏教は覚の実践哲学であること、人間教育の体系であり、究極的には「仏」になることを目指すものであることを指摘する。[8]田丸は「仏教の究極的な目標は、悟りに到達して仏陀になることである」とし、「仏教は「人間学」であるとする見方には十分に肯ける」と述べている。そして悟りとは「自覚覚他」、「自ら覚し他を覚せしめる」の悟りに他ならず、その意味で仏教の本質は教育体系であると明かす。[9]藤田は、「仏教はその本質において教育体系であると考えられ、仏という言葉そのものがすでに教育体系を表現しているのではないかと思われる。仏すなわち仏陀とは、「自ら覚し他を覚せしめる覚行窮満したるをいう」という辞書の説明そのものが、教育体系たることを示すものに外ならないのである」と述べる。[10]つまり仏教の教え（教育）を受ける者（衆生、凡夫など）が、目指すべき究極のあり方は、歴史上はじめて「仏教」の教えを説いた釈尊と同等の「悟り」に到達し仏陀となることにあると考えられる。そして釈尊の「悟り」の内容とは、「縁起」の理法であるといわれる。朴は「釈尊のさとりの内容でありながら同時に釈尊自身が衆生等にひろく教説してよく知らせようとしたのは縁起法であった」「釈尊の思想で教育内容の中の真正な知としての智慧は、すなわちこのような縁起法のさとりによる智慧である。また実践としての教育内容は、釈尊の伝道宣言では慈悲実践としての伝道の遊行であるといえる」と述べている。[11]そして水野が指摘するように、[12]仏教の縁起説とは、

此あるに縁って彼あり。此生ずるに縁って彼生ず。
此なきに縁って彼なし。此滅するに縁って彼滅す。

を基本とする。縁起とは「縁りて起こること」であり、「縁りて」とは「条件によって」、「起こること」とは「起こる」道理のことである。したがって縁起とは「種々の条件によって現象が起こる起こり方の原理」であるから、縁起とは「縁起の道理」であり、現象の相互依存の関係を指す。縁起説は仏教の根本説であり、法そのものであるとされる。つまり全てのものは縁起であり、単一・独立の存在ではなく、縁って生起する。それゆえに単一・独立の存在となる創造神も絶対的な根源もあり得ず、あらゆるものは常に変化し構成されるものである。自己存在も例外ではなく、自は他との関係によってはじめて成り立つ。これを「自他一如」という。自己は単独で成立するのではなく、他との関係性、様々なありとあらゆる関係性において仮に存在しているのである。この縁起の思想は「無我」ともいえる。仏教にいう無我とは一般的に使用されているような「無我夢中」や「無我の境地」とは異なる。我とは古代インド語でアートマンといい、永遠不変なる存在を意味し、神、魂などとも訳される。そもそも古代インドの宗教であるバラモン教は、永遠不変なるアートマン（我）の存在を認め、輪廻転生に基づく「生まれ」による身分的差別を肯定している。したがって仏教における無我とは永遠不変なる実体はない（無我）、あるいは永遠不変なる実体ではない（非我）ことをいい、大乗仏教においてはそれを空ともいう。他の宗教にはなく仏教独自の特徴ある教説であることを示す三法印のうちの一つに、「諸法無我」とあるように、仏教では一切のもの、諸法・諸存在は無我であり、永遠不変なる実体的な存在ではないと考える。

かかる釈尊の「無我」について、直接には非実体を説くものではないとする説がある。[13] しかし「無我性」について、水野は、大乗仏教の「空性」、「空」とも同じことであって、「理論的には実体本体を認めず、またものの固定性を認めないこと」であると述べている。かかる無我とは「我がない」「我でない」との意であり、我とは生滅変化を離れた永遠不変の存在とされる実体、本体といわれるものである。この実体や本体は仏教で

はこれを経験し認識することができないから、それが存在するか否かは不明であり無記であるとして、これを問題とすることを禁じた。この意味で仏教では「実体的な我がない」とはいえないが、われわれの世界における一切法が「我でない」ということはできる。そこで諸法無我とは、すべてのものは我でないということになる、とも明かす。さらにこの無我（非我）について小川は、「我はない」「我ではない」という二つの否定の義があることを認め、諸法無我は、すべての存在は常住不変な我のようなものではない（我ではない、非我）と理解すべきであろうとする。そのうえで「しかし、すべての存在が我のような常住不変なものとしてありえないということは、「我」のような存在は何ひとつないことになるから、結局は「我はない（無我）」ということになる」とも明かしている。[14] 以上の説を踏まえ筆者は、釈尊にいう「諸法無我」は直接的には一切のものは「我ではない（非我）」ことを説いているが、その意味するところは、永遠不変なる「我はない（無我）」という意味であると考える。それ故に自己存在も例外ではなく、「我はない（無我）」のであり、固定的実体的な存在とはいえない。一切のもの（諸法）は、「無我」の「我」としてあるわけであり、いわばかりそめの仮我なる存在である。それゆえに人間は自らの修練により、常に変化し続けるのであり、無上の智慧を体得し生老病死の四苦に代表される人生の様々な苦を解決し、仏となり得るともいえよう。田丸は、理念のレベルで仏教が将来の教育に貢献できる点として、「自らの修練により、無上の知恵を体得することをめざす仏教の本義は、まさに教育の目標と一つであり、仏教はこの意味ですぐれて教育的な宗教と言えるであろう」と指摘する。[15] 自己はあくまで固定的実体的な存在ではなく常に構成されるものであり、まさしく「諸行無常」、一切の現象世界は常に変化するのである。これが釈尊仏教にいう無我である。ではなぜ「無我」なのかといえば、それは「縁起」であるからであり、また「無我」であるから「縁起」であるともいえる。「無我」と「縁起」は全く別のものではない。例えば大乗仏教を理論化した龍樹は『大智度論』に、

自在なるが故に無我なり。主無きが故に、名づけて無我と為す。諸法は因縁より生ずるが故に無我なり。[16]

と述べ、「無我」と「縁起」が不二の関係にあることを示す。そしてこの「無我・縁起」の立場から自己の努力、修練、向上が考えられてくる。例えば『法句経』には、

自己こそ自分の主である。他人がどうして（自分の）主であろうか？自己をよくととのえるならば、得難き主を得る。[17]

などとあり、釈尊は自己の主体性とその努力の必要性を説く。さらに『スッタニパータ』には釈尊が、

生れによって賤しい人となるのではない。生れによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなるのである。[18]

生れを問うことなかれ。行いを問え。[19]

と説いたことを記している。また小川は、「釈尊も神の裁きとか、業報輪廻とか、そのようなことを信じていなかったのではないかということです。」[20]と述べ、釈尊の業報思想の基本は「自業自得」であり、自分の行った行為の結果は自分が引き受けていくという、自業自得が釈尊の業の基本であった、と指摘する。また善悪の業を超え、倫理を超える仏教の立場から、釈尊は「いわゆる倫理という人倫のための道徳というレベルで業報ということを説いていた」と述べている。筆者も同様に理解する。釈尊は、輪廻思想に基づく「生まれ」による身分的差別を否定し、運命論や実体論を否定する「無我」の立場から、各人のそれぞれの努力を肯定し、自己の行い（の結果）は自らが得なければならないという「自業自得」の業論を語る。それ故に各人の「努力」や「行為」を肯定し、自己の行為は自己自身が責任を持たねばならないことを明かしている。そして仏は悟りの内容となる「縁起」という法（真理）を、いまだ悟りを開いていない衆生等に説き教授し〈覚他〉、いまだ悟りを開くことが出来ていない衆生等は、仏の法（真理）を聞き教授を受けることにより、「悟り」という究

極の目的に到達していくこと〈自覚〉を目指すのである。この仏の説法により衆生が仏へと到達しようとする仏教のあり方は「自覚覚他」であり、（悟りの内容となる法の）教育といえよう。したがって悟りの内容となる法、すなわち「縁起」（自他一如、無我）の思想こそが、仏教教育の中核であるといえる。次節では「無我（非我）・縁起」の思想から「ＩＢの学習者像」について考察してみたい。

二　釈尊仏教の無我・縁起の思想からみる「ＩＢの学習者像」

ＩＢの10の学習者像はすでに示した通りであるが、そのうち傍線部は「縁起」の思想に関連する箇所に該当すると考えられるものである。以下において、ＩＢの学習者像に「縁起」の思想を見いだしていきたい。

まず10の学習者像についてそれぞれに「私たちは」（Ｗｅ）が主語に据えられている。「私は」（Ｉ）という限定された自己が主語ではなく、「私たちは」と述べているところに、自己だけでなくあくまで他者とともにある自己であることが意識されている。これは国際的な視野やグローバルな視点に由来すると思われるが、仏教において考えるならば、これは「縁起」という視点であり、「自他一如」の思想とみることができる。先述のように仏教では単一の自己（我）は存在せず、常にあらゆる他者とのかかわりの中で自己は存在し得ると考える。それゆえに釈尊仏教からみれば、ＩＢの学習者像の主語となる「私たちは」（Ｗｅ）とは、「自他一如」としての自己を示し、「縁起」の理法と関連付けられる。さらにＩＢの10の学習者像には、「ひとり」（自）と「他の人々」（他）と共に、という視点があり、自他一如（縁起）の思想を見出し得る。その箇所を以下に列挙したい。

（1）「探究する人」
ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。
（2）「知識のある人」
他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。
（6）「心を開く人」
自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。
（7）「思いやりのある人」
私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。
（9）「バランスのとれた人」
私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。
（10）「振り返りができる人」
世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。

以上の6つの学習者像には、釈尊仏教における縁起の思想、自他一如の思想と関連付けて理解できる。特に傍線部には、「自」と「他」ともに、という自他一如の思想が強く示されているといえる。さらに注目すべきは（7）と（9）である。

まず（9）には、「私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています」とある。これはまさしく仏教にいうところの「縁起」である。先述の通り仏教において縁起とは、相互相依の関係をいい、まさに「相互に依存している」あり方である。そして（7）に「私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します」と述べ、思いやり・共感・尊重の精神について語った上で、「他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します」と示し、「自」のみでなく「自他」をともに良くすることへの行動について述べている。この精神と行動は、仏教にいうところの「慈悲」（小悲、ＩＢのＣＡＳ〈創造性・活動・奉仕〉）に該当するとも考えられよう。仏教において真実は縁起であり自他一如であるから、他者と無関係の自己は存在しえない。したがって相手を思いやり、その苦に共感し、相手の苦を抜き、楽を与えるという「抜苦与楽」の「慈悲」が重視される。ＩＢ教育においても他との関係性（仏教にいう自他一如）を重視する教育であるから、当然にして（7）「思いやりある人」において共感・尊重の精神とそれに対する行動が語られていると考えられる。

また先述のように釈尊仏教においては、あらゆるものは「縁起」であるから、永遠不変なる固定的実体は存在せず、全ては「無我」であり、自己も同様にして永遠不変なる固定的実体的な自己ではない。したがって常に変化するものであり、自己は常に行為により構成されていくものである。それゆえに釈尊は、自己の努力・行為・修練、ならびに「自業自得」を語るのである。この「自業自得」の精神はＩＢの学習者像においても語られている。その箇所を特に示せば次の通りとなろう。

（1）「探究する人」

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

（2）「知識のある人」
私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。
（3）「考える人」
私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。
（4）「コミュニケーションができる人」
私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。
（5）「信念をもつ人」
私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。
（6）「心を開く人」
私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止める
（7）「思いやりのある人」
他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。
（8）「挑戦する人」
私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。
挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。
（9）「バランスのとれた人」
私たちは、（中略）と理解しています。また、私たちが（中略）を認識しています。

（10）「振り返りができる人」
自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。
（傍線、引用者）

このようにＩＢの学習者像には、自己の行動に伴う責任や結果を引き受けていく、自業自得が語られているのである。

三　「仏教」と「ＩＢ」の相互補完的教育論

これまでの論考を踏まえ、仏教からみるＩＢ教育の意義について考えてみたい。これは今後、ＩＢ教育が仏教校において積極的により広く受容されていくための、仏教に基づく「ＩＢ教育」の理論を確立していくことに繋がるだろう。

すでに図１ＩＢＤＰカリキュラムモデルにあるように、ＩＢ教育はＩＢの学習者像に基づくプログラムであり、その学習者像を体現するためのプログラムといえる。大迫は、「ＩＢはもちろん、ＤＰも、中心に置かれた「ＩＢの学習者像」にたどりつくために、それぞれのプログラムの各要素が設計されている教育プログラムなのです」と述べている[21]。この学習者像は釈尊の縁起の思想に基づいて理解出来ることから、仏教（縁起）に基づくＩＢ学習者像とみることができる。すなわち全てのものはあらゆる関係性によって起こっている「縁起」の存在であり、永遠不変なる固定的実体はなく「無我」であるから、ＩＢの学習者像が成り立つ。特にそれは（７）「思いやりのある人」の学習者像や（９）「バランスのとれた人」の「私たちが他の人々や、私たち

が住むこの世界と相互に依存していることを認識しています」に表されている。それゆえに仏教校のＩＢ教育の場合、図１ＩＢＤＰカリキュラムモデルの中央に「仏教」（縁起）の思想を据えて、学習者像、ならびにＩＢＤＰを示すことができる。すなわち仏教に基づくＩＢ教育とは、「仏教（縁起）→ＩＢ学習者像→ＩＢＤＰ」という図式で示され得る。さらにＩＢの学習者は、そのＩＢ教育を通じて学びを深めていくわけであるから、「仏教（縁起）→ＩＢ学習者↔ＩＢ教育」と双方的な関係で図式化できる。そもそもＩＢにおける10の学習者像についてＩＢ教育の中核に据えられているものの、この10の学習者像の根拠となるものは、「ＩＢの使命・理念」以外に具体的なものはみられない。仏教校のＩＢ教育の場合、その学習者像の根拠を、建学の精神となる「仏教」自体に求めることができるのである。それでは学習者像の根拠となる「ＩＢの使命」と仏教の縁起の思想はいかに関連性を持つのだろうか。

「ＩＢの使命」には、「ＩＢのプログラムは、世界各国で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています」（傍線、引用者）とある。特に傍線にあるように、ＩＢのプログラムは、自他の相違を認め、どちらも否定することなく、互いに肯定し共感していくことを目指している。仏教の場合、すべてのものは関係性によって成り立っている縁起の存在であり、固定的実体的存在はあり得ない無我なのであるから、自己の都合によって自分の価値観のみを是とし、他の価値観を否定することはできない。したがって仏教の縁起の道理に基づくことで、「人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人」を作ろうとするＩＢの使命に共感していくことができる。それゆえに、仏教を建学の精神とする学校は、釈尊仏教の思想（縁起）を中心に据えることで、ＩＢの理念・使命に基づく学習者像、ならびにＩＢプログラムを考えることができる

のである。したがってＩＢの教育は、仏教校の建学の精神とおおよそ合致していくものと考えられる。仏教とＩＢの関係を図示すれば図２の通りとなる。それゆえＩＢの学習者像の内に、仏教の根本思想たる「縁起」を見出し得るのであるから、生徒は仏教の縁起の思想がすでに包摂されているＩＢの学習者像に対し、個人の自由な解釈が可能になっていく。ＩＢの学習者像に対する理解の深度について、全く妨げにならないのである。

このように仏教とＩＢ教育は関連付けて理解でき、しかもＩＢの学習者像を仏教によって補完的に根拠づけることもできるのだが、元来、仏教教育の最大の目的は、「縁起」の理法をさとることで人生苦を解決しさとりを開かせていくことにある。縁起を悟ることで自己中心的な思い（欲望・煩悩）から離れ、人生の苦を解決していく。到達できるかどうかは別として仏教教育の最終目標は、やはり転迷開悟にあるだろう。いうまでもなくＩＢには、仏教教育の最大の目的たる転迷開悟の視点に該当するものは全くないのであり、そこに大きな相違があるといえる。しかし他方、ＩＢの学習者像は、釈尊仏教の根本教説たる「縁起」の思想から説明することができる。その視点に立てば仏教教育にＩＢ教育を受容していくことは十分可能であるといえる。問題はどのように受容するべきかいうことである。もちろん仏教校においてＩＢ教育をそのまま導入していくことも良いと思うのだが、筆者はさらに一歩進めて、仏教校においてＩＢ教育を受容していく場合には、釈尊仏教の「縁起」の理法をその根底に据えることで「仏教」と「ＩＢ」を

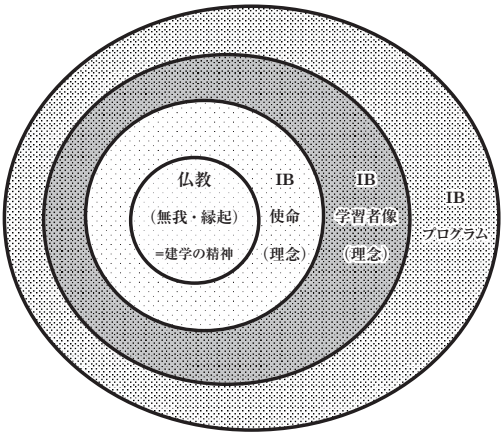

図２　仏教とＩＢの関係図
（筆者作成）

併存させた教育を提唱したい。かかる「仏教」と「ＩＢ」の併存教育によって、世界的に認められているＩＢ教育を、釈尊仏教における「縁起」の真実に合致する教育として導入していくことができよう。

かかる併存の教育は大きな可能性を秘めている。仏教教育の重要な側面である「自他」の救済という宗教教育の側面と、ＩＢという国際教育の側面の両者を一体化した教育が実現可能となるからである。それゆえにかかる一体型の教育は、仏教教育の弱点となろう「国際理解教育」（世界的に評価された教育プログラム）を補い、ＩＢ教育の弱点となろう（自他の救済としての）「宗教教育」も補うこととなり、「仏教」と「ＩＢ」が教育において相互に補完する関係が生まれてくる。すなわちここに「仏教」と「ＩＢ」の相互補完的教育論を導きだすことができ、仏教校ならではの特徴あるＩＢ教育をも見出していくことなるだろう。

結　論

釈尊の悟りの内容は縁起である。自らが真理に目覚め仏となり、いまだ目覚めていない衆生を目覚めさせていく自覚覚他の仏教教育において、真理となる縁起は、仏教教育を考える上で非常に重要なものといえる。その縁起の思想からＩＢの10の学習者像を考察すると、ＩＢの学習者像には以下の特徴をみることができる。

（1）自他一如（縁起）・慈悲の視点

・「ひとり（自）と他の人々（他）と共に」

・学習者像は全て「私たちは」（Ｗｅ）が主語

（2）自業自得（無我）の視点

・「自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもつ」
・理性的で倫理的な判断を下す

このＩＢの学習者像に示された２つの特徴は、国際バカロレアの教育上に縁起の思想がみられることを示している。しかもＩＢの学習者像の全てが「私たちは」（Ｗｅ）を主語とし自他一如の自己を明らかにした上で、その自他一如の自己が探究し考え、自己の責任において行動していくという深い学びを求めている。縁起なる自己がどのような学習者像となり、どのように学習すべきかがＩＢ教育であり、そのための教育プログラムであると考えることができる。さらにＩＢの使命に、「人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人」とある。縁起の道理に基づけば自他の相違は当然であり、それぞれの正しさが認められる。かかる「ＩＢの使命と学習者像」は「ＩＢの理念」であるがゆえに、「ＩＢの理念」の中に、仏教の縁起の真理をみることができるのであるから、西洋的とされるＩＢ教育が、実は東洋の思想である仏教の思想とも合致していくことを指摘することができる。それゆえに筆者は、仏教校におけるＩＢ教育として仏教（縁起）を基底とする「宗教教育」と「ＩＢ教育」の併存を提唱する。かかる教育を図示すれば、図３の通りである。

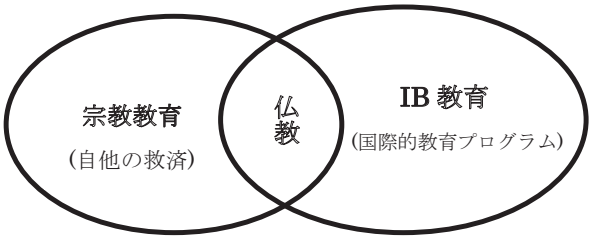

図３　ＩＢ教育と宗教教育
（筆者作成）

以上、仏教校の建学の精神とＩＢの合致を示す論理の構築により、仏教校もＩＢ教育を導入しやすくなる。そして今後さらに仏教（あるいは宗教）とＩＢとの関係性を明らかにできれば、仏教校のＩＢ導入はより積極的なものとなり、

ひいては日本におけるＩＢの発展にも繋がると考えられる。そして普遍的な世界宗教との関係を明かしていくことは、ＩＢ教育の普遍性を示していくことになるだろう。その一例として、ＩＢＤＰのＴＯＫ（知の理論）・ＣＡＳ（創造性・活動・奉仕）と仏教における智慧・慈悲の関係についても述べておきたい。[22]

仏教の智慧は無我・縁起に基づき、固定的実体的な「知」はなく常に変化するものであると考える。そして智慧と慈悲は一体のものである。全ては無我・縁起の存在であるが故に、事実をありのままに見る智慧（如実知見）によれば、一切のものが繋がりあって存在していることがわかる。従って「自」だけ良ければ良いのではなく、「他」を思いやり慈しむ「慈悲」が伴わなければならない。智慧は慈悲を伴い、慈悲は智慧を伴うのであり、智慧の内容を行動し、実践していくのが慈悲といえる。この慈悲には大悲・中悲・小悲の三縁の慈悲があり、小悲は人間が他を様々な活動によって救う在り方であり、ボランティア活動などを含んでいると考えられよう。

先に論じたように、ＩＢの中核となるＩＢの学習者像には、釈尊仏教の根本思想である「無我・縁起」の思想を見いだすことができる。特に、学習者像の（７）には思いやり・共感・尊重の精神を示し、「他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します」と述べ、「自」のみでなく「自他」をともに良くすることへの行動を明かしている。この精神と行動は、仏教にいう縁起に基づく「慈悲」（小悲）に該当し得るだろう。それゆえにこれらの学習者像は、「無我・縁起」の思想（自他一如）と関連付けて理解できる。またＴＯＫの科目はこのＩＢの学習者像に基づき開設され、「知」を構成していくものであり、それぞれの学習者において常に変化するものであると考えている。それ故にＴＯＫの「知」のあり方は、「無我・縁起」の思想に基づき、固定的実体的な「知」はないとする、仏教の「智慧」の理解と共通するものといえよう。[23]

さらにＩＢのＣＡＳは、仏教の慈悲（小悲）を具体化する教育とみることもできよう。「「創造性・活動・奉

仕」（ＣＡＳ）指導の手引き」[24]によると、コアはＤＰの本質であり、「コア」の３要素を担当する教師は、どのようにすれば生徒がＤＰで学習する科目のより深い理解にＴＯＫ、ＣＡＳ、ＥＥを役立てられるかを注意深く検討し、計画する必要がある。ＣＡＳには以下の例が考えられ、「奉仕を通じて学ぶ機会を得ることにより（中略）その領域での新たなそしてより深い知識を構築できるようにする」とある。そして「コア」の役割の実践方法としてＣＡＳには「他人の助けが必要な人を支援する自らの取り組みを評価し、擁護という考え方について追求する」との例が考えられている。またＣＡＳのうち「奉仕」（service）については「コミュニティーの真のニーズに対応するために他者と共に活動を行い、かつ相互扶助の取り組みに従事すること」と記され、プログラムのねらいは、「地域や世界のコミュニティーの一員として、他の人や環境に対して責任を負っていることを理解する人」となるように生徒を育てることにある。さらに４種類の奉仕活動には、「直接的な奉仕：他者、環境、または動物などとのかかわり合いをもちます。」「間接的な奉仕：間接的な奉仕では、（中略）自分の行動がコミュニティーや環境にとって有益であること」などとある。それ故に、生徒のＣＡＳの実践は、仏教における小悲の実践ともいえる。そして、ＩＢ学習者像〈無我・縁起〉に基づくＴＯＫ〈智慧〉・ＣＡＳ〈慈悲〉という構造が仏教の無我・縁起に基づく智慧と慈悲の構造と見事に合致すると考えられる。以上により、ＩＢに先立つ釈尊の仏教思想は、西洋的な価値観に基づくといわれる現代のＩＢ教育と関連付けて理解できるだけでなく、仏教を建学の精神とする仏教校が釈尊仏教の無我・縁起の思想を、ＩＢの学習者像の根底に据えてＩＢ教育を導入していくことになれば、仏教校ならではの特徴あるＩＢ教育となり、ＩＢ教育自体がその導入する学校においても意義あるものとなるといえよう。

註

（1）「ＩＢの学習者像」はGeorge Walkerが西洋的な価値観に基づくものであるとする一方で、中島章夫は「ＩＢの学習者像」と日本の中学校学習指導要領にある「道徳」の四つの目標とを結びつけて分類している。また中国にあるＩＢ校では「ＩＢの学習者像」について、究・知・考・話・義・寛・仁・挑・健・省と漢字で表している（大迫弘和「国際バカロレア（ＩＢ）について（思想篇）」『国際バカロレア入門　融合教育による教育イノベーション』二〇一三年、学芸みらい社、一〇八～一一九頁、同「日本の教育改革と国際バカロレア」『国際バカロレアを知るために』水王舎、二〇一四年、一一七～一四二頁）。このように、西洋的な価値観だけでなく、東洋の価値観からも「ＩＢの学習者像」は考察されている。当稿は、東洋思想のうち、釈尊仏教から「ＩＢの学習者像」について論考するものである。

（2）日本において、仏教校でＩＢ教育が受けられる学校は、武蔵野大学附属千代田高等学院のみである（二〇一八年度から導入）。

（3）文部科学省「国際バカロレアとは」「日本語DP」「国際バカロレアの認定校」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/（二〇一九年一〇月二四日閲覧）

（4）大迫弘和「日本の教育改革と国際バカロレア」（前註（1））

（5）文部科学大臣官房国際課『国際バカロレア認定のための手引き』http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/09/29/1353392_03.pdf（二〇一九年一〇月二四日閲覧）
国際バカロレア機構『ＩＢの一貫教育プログラム　国際バカロレア（ＩＢ）の教育とは?』（二〇一四年）International Baccalaureate Organization(UK)Ltd. http://www.ibo.org/globalassets/digital-tookit/brochures/what-is-an-ib-education-jp.pdf（二〇一九年一〇月二四日閲覧）

（6）前註（3）参照。

（7）高楠順次郎『生の実現としての仏教』（大雄閣刊、一六二四年、一一八頁）

（8）竹内明『仏教と教育』（仏教大学通信教育部、一九八五年、四一頁）

（9）田丸徳善「仏教思想の教育的意義」（斎藤昭俊編著『仏教教育の世界』北辰堂、一九九三年、三三～三九頁）

（10）藤田清「教育体系としての仏教」（『仏教教育の世界』北辰堂、一九九三年、四三頁）

(11) 朴先榮「釈尊の基本的な教育思想試論」(『仏教教化研究』思文閣出版、一九九八年、三二頁)
(12) 水野弘元『仏教用語の基礎知識』(春秋社、一九七二年) 一五七～一五八頁
(13) 中村元「ブッダの根本思想とその人類史的意義」(『ブッダの世界』学習研究社、一九八一年)、二瓶孝次「釈尊のさとりと道徳的発達(下)―実践的概念としての「無我」―」『北海道教育大学紀要』四六巻一号、一九九五年。
(14) 小川一乗『大乗仏教の原点―生死即涅槃』(文栄堂、一九九〇年) 三六頁
(15) 前註(9)参照。
(16) 鳩摩羅什訳『大智度論』三一、『大正蔵』二五巻、二九三頁
(17) 中村元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』(岩波書店、一九七八年) 三二頁
(18) 中村元訳『ブッダのことば―スッタニパータ』(岩波書店、一九八四年) 三五頁
(19) 中村元訳、前掲書、九五頁
(20) 小川一乗『大乗仏教の根本思想』(法藏館、一九九五年) 九〇～九六頁
(21) 大迫弘和「日本の教育改革と国際バカロレア」二〇一四年、前掲。
(22) 以下は、二〇一八年九月に第3回日本国際バカロレア教育学会全国大会にて、「国際バカロレアディプロマプログラムのTOK・CASと仏教教育における智慧と慈悲」と題し、発表したものである(『第3回日本国際バカロレア教育学会全国大会』参照)。
(23) 田中無量「国際バカロレアのTheory of Knowledge(TOK)と仏教における知」(「日本アクティブ・ラーニング学会」、「国際バカロレアとアクティブ・ラーニング」予稿集、二〇一六年)
(24) 「「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き」(二〇一七年卒業予定者から適用) https://www.ibo.org/globalassets/publications/cas-guide-2017-jp.pdf (二〇一九年一〇月二四日閲覧)

(武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員 博士(文学))